

---

# 彼はまだ彼女の想いに気付かない

勇者王

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼はまだ彼女の想いに気付かない

### 【Nコード】

N0969BA

### 【作者名】

勇者王

### 【あらすじ】

ごく普通の優しさは皆が認める男子高校生こと馬場恋士ばば れんしはこの17年間恋愛経験ゼロ「童貞だ。そんな彼には好きな女の子がいた。この想いをその子に伝えたのだが、『ごめんなさい』一瞬の内に降られてしまった。でもその子は彼のことが前から好きだった。なのに何故断ったのか…恋士はその事を知らない…いや、ただ気づいていないだけ。そんな彼がおりなす鈍感覚ラブコメここに推参！！

## プロローグ

もうすぐ秋も終わる頃の秋と冬の風が混じって吹き付ける11月の中旬。

そこに一人の少年が一生懸命勇気をだして一人の可愛い女の子に告白していた。

『ごめんなさい』

俺こと馬場<sup>ばば</sup>恋士<sup>こいし</sup>は目の前の女の子に深々と頭を下げられた。

『…い、いっていいって！むしろこんなこと、突然呼び出した俺が悪いんだから…』

俺は今も深々と頭を下げている女の子に平静を装いながらしどろもどろしていた。

振られた。振られてしまった女の子に……。

しかもただの女の子じゃなく美少女にだ。髪は黒髪、身長160前半で端正で整った顔立ち。こんな美少女に振られてしまったら立ち直りたくても俺は無理だ。

と、心の中でため息をついていると、

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

『あ、あのチャイムが鳴ったのでこれで失礼します』

と、チャイムがなると同時に美少女の女の子はそそくさと教室に戻っていった……。

〜第1話〜沈んだ彼は気付かない

『ハアアアアア〜〜〜……………』

俺は机の上でため息をつきながらさっきのことを思い出していた。

そう、何を隠そうこの俺こと馬場恋士ばははれいしは昼休みに美少女の女の子に振られてしまったのだ。

そんなことを知らない俺の親友？が声をかけてきた。

『よー恋士何つつぶしてんだ』

『うん？……………誰だお前？』

『うん？、はねえだろそれに今の少しの間はなんだよ！？』

俺はさっきのことが相当堪えたのでこいつに嫌がらせを試してみた。

そうそう説明してなかったがこいつの名前は三条安彦さんじょうやすひこ俺の悪友で小学生の頃に知り合い意気投合して今の関係に至る。まあ、早く言っ  
てしまえば腐れ縁だ。

『おいおい、誰だはないだろ誰だは。てかさっきから誰に説明して  
んだよ！！』

『う〜んまあなんだ。俺は今とても気分が良くない。だからとつと  
と自分の席に座ってる』

安彦の質問を無視して俺は命令口調でつぶしたまま言った。

『おい何で命令口調なんだよ！！てか、俺の質問完全無視！ひどい  
せつかく心配して来てやったのに……………』

そういってとぼとぼしながら自分の席に戻る安彦。心配して来てく  
れたのに悪いな。だが、今はお前の相手をする気力がない。

『ハアアア……………これからどうすつか……………』

俺はこれからのことをどうするか考えながら、次の授業を受けたの  
だった……………。

……………

夕日が照らす放課後。

俺は学校から一番近い商店街に来て今日の晩御飯の買い出しに来て

いた。

『あら 恋士君今日も買い物？』

八百屋から出てきたおばさんが笑顔で近寄ってきた。

『こんにちは。実は今日も親達が帰ってくるのが遅いんですよ、だから今日も買い物にきたんですけど』

と、頭を少しかきながら説明しているとふと、目に留まるものがあった。

『おばさんこれってなんですか？』

俺が目に残ったのは男子高校生の頭一つ分位の小さな狸の置物だった。

『うん？ああ、これね。これはいつも家に買いに来てくれるお客さんにもらったのよ。』

そう言うと、おばさんは狸の頭を撫でながら苦笑していた。

『これをくれたお客さんが』これがあればこのお店も商売繁盛ですよ ”なんて笑顔でいったんだけど…』

するとおばさんは少し笑いながらいった。

『でも、普通商売繁盛の置物っていったら招き猫でしょ？』

そう、普通なら商売繁盛の置物といたら間違いなく招き猫の置物だ。

『でも、それをいったら”招き猫なんてただの置物です！”なんていって怒られちゃったのよ。』

うわ〜…：どんだけ招き猫嫌いなんだよソイツは。狸だってそうは変わらないだろうに…：どんな奴か顔がみてみたいな。

そう心の中でいっているとおばさんが、

『でもその子がこれを入れてから少しお客さんが増えたのよね』

ふ〜んってマジか！！狸は猫より金運上がるのか！。

『それとその子、恋士君と同じ学校のはずよあと同級生よ確か』

『え、ほんとですか？』

学校一緒でしかも学年も同じ。そんな俺の学年でそんな狸の置物が好きな奴いたっけかな？

俺がうーんとない知恵を搾って考えていると、

『そういえばその子、恋土君のこと知ってたわね』

おうおう、俺のことを知っている？ますます誰だかわかんなくなってきたぞ。

『おばさん、その子の名前はなんて……。』

『ああ、言っただけだったわね。その子の名前は藤倉さん家の花怜ちゃんだよ。』

ちよつと待て。今のは聞き間違えか？藤倉花怜って俺が昔、振られた子じゃないか？

動揺しながらあの頃の思い出がフィードバックしてしまった……。

そう、あれは小学校六年生の卒業。俺は小学生最後の日に思い切って告白をした。その告白の相手は藤倉花怜その人だった。

だけど俺が告白したら、その子（藤倉花怜）は黙ったまま静かに佇んでいた。

と言うより固まっていた。

その時、俺は確信した。振られたのだと……。

俺がそう考えている最中もまだ藤倉花怜は固まったまま動こうとはしない。

その頃の俺は自分が振られたと思い背を向けて駆け出してしまっていた。

そんな思い出の人が俺のことを覚えていてくれた。

嬉しい。

学校と学年が一緒だが、あれ以来顔を逢わせて居ない。

それでも覚えてくれていると思うと素直に嬉しい。

そう思っただけの思い出しながらおばさんと世間話をしてると、

『母ちゃん母ちゃん 誰と話してるの？』

店の奥からミニポニーテールの女の子が出てきた。

『美咲、遊んでないで店の手伝いしなさいよ！』

ミニポニーテールの女の子が出てきてそうそうおばさんが少し呆れた顔で言っていた。

『え〜そんなのめんどくさいよ〜…それより母ちゃん今誰と話して…』

と、そこまで言っただけミニポニーテールの女の子”美咲ちゃん”はこっちを見た瞬間顔を真っ赤にしていきなり口をパクパクしながら変な声を出していた。

『え、と美咲ちゃん大丈夫？』

『え……あ、はい！大丈夫です！』

いきなり来て硬直するなんて俺のことがそんなに苦手なのかな？

美咲ちゃんは俺に会うたびにいつもこうなのだ。

口をパクパクさせるのはいつものことなのだが下手したら失神してしまうほどだ。

それを知っている俺は非常に対応しづらい。

俺から話そうとするとダメなのはわかっていても美咲ちゃんからは全然話しかけてくれない。

それどころか、目さえ合わせてくれない。目を合わせようとすると顔を赤くしていつも逸らされる。

う〜ん、ホントに困ったものだ。

俺が対処に困っていると美咲ちゃんがハッ、といきなり我に帰っておばさんを店の奥に引っ張っていきなにかを話した。

うん？どうしたんだらう？

少し気になったので耳をすます。

『母ちゃん！！恋土さんが来てるならなんで教えてくれないのよ！』

！

美咲ちゃんの怒鳴り声。

う〜ん全然聞き取れない。

『そんなの知らないわよ、あんたが店を手伝わないのが悪い。』

ビシッとおばさんが美咲ちゃんにそう言う。

美咲ちゃんはどう〜、と少し唸っていた。

『ほら美咲、う〜う〜唸ってないでさっさと店手伝いなさい』

おばさんがそう言うのと美咲ちゃんはう〜分かったよ〜と、いいなが

らレジの隣に掛けていたー美咲専用のー少しフリルのついたエプロンをつけ始めた。

『美咲ちゃん店の手伝いするんだ偉いね』

そう俺が誉めると美咲ちゃんは

あ、ありがとうございます！と

手を腰の辺りにやりながらモジモジしていた。

そんなポーズをとっていた美咲ちゃんが可愛かったので、

『エプロン姿の美咲ちゃんって可愛いね』

と、もう一度誉めてみた。

すると今度はみるみる美咲ちゃんの顔がカアツとなっていていきその場

で力が抜けたみたいの下手りこんでしまった。

『み、美咲ちゃん大丈夫！？』

力の抜け切った美咲ちゃんに近付く。

『カ、カワイイなんてそんな…いきなり…。』

熟したリンゴみたいな顔の美咲ちゃんはどこを見ている(？)のか空を見上げながらこっちは聞こえない声でブツブツとその場下手りこみながら呟いている。

すると、おばさんが、

『恋士君威力強すぎ…。』

とおばさんが美咲ちゃんを見つめながら言った。

俺はその意味が全くわからないでいたのだった。

.....

八百屋で少し世間話をしたあと、食材がまだ足りなかったなので他の所で買い物をした。

ちなみに今日の晩御飯はカレーライスならぬライスカレーだ。

何故だか我が家ではライスカレーが一般的なのだ。

俺の母さんが言うには、カレーライスはご飯が少なすぎる、だそうなのだ。

俺はどっちも変わらないとは思うのだが母さんが言うので仕方ない。そんなことを考えながらさっき商店街で買った食材をビニール袋に



入れて帰路に着く。

『ただいま……と言っても誰も居ないかー』

『あら お帰りなさい恋士君』

台所からひよこつと見知った顔の美人のお姉さんが顔を出してきた。

『みや姉きてたんだ』

『うん、今日は部活ないからね』

するとみや姉はトテトテと近寄ってきていきなり俺を抱き締めてきた。

『ちょ、ちょっとみや姉……ワフツ!?!』

『あ………やっぱいいわ』

ギョ………と抱き締めながらみや姉が嬉しそうに言う。

『今日は朝が早かったから一緒に学校もいけなかったし、恋士君と一緒に朝食べようと思つて教室に行つてもいないし……物凄く寂しかったんだからね』

『……!?!』

胸の奥深くに思い出したくもない昼休みの事が頭の中でフィードバックする。

忘れたいはずなのに昼休みの事が頭から離れない。だからと言ってその事を知っているのはコクつた俺……降つた彼女（藤倉花怜）しか知らない。なのでみや姉はこつちが考えてる事なんかお構い無しにみや姉がだから……と切り出した頃には既に遅かった。みや姉は強く抱き締めながら嬉しそうに言った。

『だから今日は私が恋士君のご飯を作りにきたの』

『わ、分かつたから早く離してよ!!--』

俺はこのままじゃ口から出てはいけないものが出てしまうことを悟りみや姉に言った。

『う……恋士君が冷たい……ぐすつ……良いじゃない今日ぐらいは……』

抱き締めるの力を緩めながらみや姉が目には涙をためながら言う。

『今日ぐらいは……て、いっつも俺を抱き締めて来るじゃないか!!--』

『テへ』

ペロツと下を出しながら自分の頭に手を置いて言う。

ため息をついている俺にみや姉がニコニコしながら手を合わせながら言った。

『スキんシップはこのぐらいにして、早く恋士君は着替えて来てね。もう料理は用意してるから』

ご飯はみや姉が作っているらしく俺のお腹が悲鳴をあげているので急々と着替えを済ませることにした。

.....

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0969ba/>

---

彼はまだ彼女の想いに気付かない

2012年1月2日04時51分発行